

## Did the English History Play Decline during the Reigns of James I and Charles 1?

Ota Kazuaki  
Faculty of Language and Cultures, Kyushu University

<https://doi.org/10.15017/1337440>

---

出版情報：英語英文学論叢. 52, pp.13-34, 2002. 九州大学英語英文学研究会  
バージョン：  
権利関係：



# 英国歴史劇はスチュアート朝において 衰退したか\*

太田 一 昭

## I

通説によれば、英国歴史劇はジェームズ朝に入ると、あるいは1610年頃から衰退したという。本稿の第一の目的は、この通説を再検討することにある。もう一つの本稿の課題は、創作・初演情報に過度に依存した演劇史の問題点を指摘し、演劇史記述に旧作品の再上演情報を組み込むことの重要性を提唱することである。この二つの課題は、密接に関連している。というのも、歴史劇は年代による流行が云々されることが多く、そこに創作・初演情報にもとづく記述の問題点が典型的に現れているからである。

歴史劇の「衰退」について、一般に認められている説は次のようである。

Following the accession of James I the history play passes into a period of rapid decline, with only a momentary rise at the very end of the great age of English drama in the *Perkin Warbeck* of John Ford. It is not only that there are fewer history plays but that the ones that are written lack the vitality or artistic merit of the earlier species.<sup>1)</sup>

量的に見れば、大学才人たちの活動期から1610年までの間に上演された英国史劇が150編にのぼるのに対して、それ以後の作品はほんの少数にすぎず、その質においてもまた、おそらくはフォードの *Perkin Warbeck* (『パーキン・ウォーベック』1633) を唯一の例外として、注目に値するものはほとんど皆無だと言ってよい。<sup>2)</sup>

---

\* 本稿は、第40回シェイクスピア学会 (2001年10月14日、九州大学) セミナー「Stuart朝の歴史劇」(司会佐野隆弥)において発表した論文にもとづいている。

1) Irving Ribner, *The English History Play in the Age of Shakespeare* (1965; Octagon Books, 1979) 266.

上掲の引用は少し古い記述であるけれども（前者は1965年、後者は1987年）、現在でも演劇史家一般に共有されている説である。歴史劇の質の低下については、異論はないかもしれない。ジェイムズ朝以降に書かれた英国歴史劇はたしかに、いかに最頁目に見ても、シェイクスピアに代表される1590年代の、歴史をリアルに描く作品群と比較すると見劣りがする。*Henry VIII* という例外はあるものの、情緒的な効果を狙った感傷的作品が多く、質が落ちているのは否定できない。

では歴史劇の「量」はどうか。A. Harbageの*Annals of English Drama* は英国ルネサンス期の演劇を年代順に記した基本文献であるが、それによれば、ジェイムズ朝以降歴史劇の創作はたしかに減少している。<sup>3)</sup> ジェイムズ朝・チャールズ朝の歴史劇で主だったものは、Thomas Dekker and John Webster, *Sir Thomas Wyatt* (1604), Thomas Heywood, *I If You Know not Me, You Know Nobody* (1604), Samuel Rowley, *When You See Me You Know Me* (1604), Thomas Heywood, *2 If You Know not Me, You Know Nobody* (1605), Thomas Dekker, *The Whore of Babylon* (1606), William Shakespeare, *Henry VIII* (1613), Thomas Drue, *The Duchess of Suffolk* (1624), そしてJohn Ford, *Perkin Warbeck* (1633)である。エリザベス朝と比較すると明らかに少ない。実はここに問題がある。というのも、歴史劇上演の減少を指摘する人々はしばしば、創作あるいは初演劇しか考慮に入れていないからである。

ハーベッジの『年譜』は、決して完璧な上演記録ではない。『年譜』によれば、たとえばシェイクスピアの所属する国王一座は、1604年に7-8本、1605年に2本、1606年に5本、1607年に2本、1608年に2本、1609年に2-3本、1610年に3-4本、1611年に6-7本、1612年に5-8本を創作・初演している。しかし、国王一座のジェイムズ朝初期のレパトリーがわずかにこれだけの作品であったとはとうてい考えられない。私たちが知らぬ創作・初演劇の他に、再演・再々演の作品が存在していたことは疑問の余地がない。ちなみにエリザベス朝の主要劇団の一つであった海軍大臣一座は、1595年から1597年までの3年間に、少なくとも年平均約30の異なる作品を上演している。（これについては後述する。）これより推測すると、ジェイムズ朝初

2) 笹山隆, 「ジェイムズ時代とチャールズ時代の演劇」, 『劇 I』講座英米文学史5 (大修館, 1987) 199.

3) Alfred Harbage, *Annals of English Drama, 975-1700*, rev. S. Schoenbaum (London: Methuen, 1964). 以下、劇の創作・初演年は、ハーベッジによる。

期の国王一座は毎年、疫病大流行のために劇場が長期閉鎖されていた1608-1609年は別として、ハーベッジの『年譜』に記載された作品数の少なくとも4-5倍の演目を上演したと考えられるのである。

一般的に言って、エリザベス朝でも現代日本でも、劇団のレパトリーが初演作品からのみ成るとは考えられない。上演には、かならずいくつかのリヴァイヴァルが含まれているだろう。<sup>4)</sup> だとすれば、ある演劇が衰退あるいは「死に絶えた」と言うには、そういう作品の創作・初演のみならず、リヴァイヴァルさえも行われなくなったことを証明しなければならない。<sup>5)</sup> ところが私たちが現在所有する英国ルネサンス演劇史は、あまりにも創作・初演情報をよりどころとし、リヴァイヴァルを軽視している。極言すれば、従来の英国ルネサンス演劇史は、創作・初演史なのである。<sup>6)</sup>

この演劇史=創作・初演史をよしとする（おそらく無意識の）思考回路は、他の演劇史関連の議論に不具合を生ずることがある。たとえば次のMargot HeinemannとJanet Clareの評言を見てみよう。（戯曲標題以外の斜字体は筆者。）

The prosecutions of *Sejanus* and *Philotas* in particular must have made it clear that *serious political-historical drama was becoming impracticable*. This is the situation that leads eventually to the Beaumont and Fletcher type of court play, in which kings have wives, daughters and mistresses, favourites and rivals in love, but no subjects below the degree of nobility. They make love or war. The one thing we never see them do is govern a country, in the sense that Shakespeare's kings and

- 
- 4) 現代日本の劇作品では、たとえば井上ひさしの戯曲の旧作『闇に咲く花』（1987年初演）が1999年と2001年に再演されている。
- 5) 河合祥一郎氏は、「注目すべきは、アン・バートンが指摘するように、フォードの『パーキン・ウォーベック』や『ヘンリー八世』などのいくつかの例外を別にして、こうした歴史劇はエリザベスとともに死に絶えてしまったかのように思えることである」と書いている。バートン（あるいは河合氏）の言う「死に絶えた」とはおそらく、「書かれなくなった」という意味である。しかし芝居は、たとえ書かれなくなったとしても、舞台での上演が続いているかぎり、「生きている」と言わざるをえないのである。河合祥一郎、『『ヘンリー八世』の王座』、シェイクスピア協会編『シェイクスピアの歴史劇』（研究社、1994年）136参照。Cf. Anne Barton, 'He that plays the king: Ford's *Perkin Warbeck* and the Stuart history play', *English Drama: Forms and Development*, eds. Marie Axton and Raymond Williams (Cambridge UP, 1977) 69-93.

Roman leaders are seen to do so. The commons may rebel in a cardboard sort of way, as they do in *Philaster*, for example, in favour of a prince victimised by tyranny: but they no longer voice their own point of view as lower orders, their own grievances against their rulers, with the vigour and realism of Jack Cade and his mates in *Henry VI*, or the soldiers in *Henry V*, or the citizens in *Coriolanus*; nor do we find consistent republican opponents of tyranny as we do in *Sejanus*.<sup>7)</sup>

With the history play under increased surveillance and dramatic satire under threat of harsh reprisals, the years 1597–1603 appear as a period when playwrights were subjected to greater than ever incursions into their freedom. Apart from those which fell foul of the censor, *the plays of the period* are remarkable only for their orthodoxy and tameness.<sup>8)</sup>

ハイネマンが（政府の弾圧的な対演劇政策のために）「深刻な政治・歴史劇」は上演不能になりつつあったと言うとき、またクレアが「当時の劇」は「正統性」がきわだっていると主張するとき、射程に入っているのは創作・初演劇だけであって、再演作品は考慮されていない。これはおかしな話であ

- 
- 6) 上に引用した笹山氏は、上演される演劇のなかに旧作の上演が含まれていることは百も承知であろう。笹山氏の言う「上演」はおそらく「創作・初演」の意味である。しかし演劇史家はいそがな書き方をしてしまうのである。これは、演劇史＝創作・初演史の観念を演劇史家が無意識に共有していることの裏返しではないか。もちろんすべての演劇史家がそうだということではない。たとえば E.K.Chambers や G. E. Bentley の古典的著作には、再演への言及が随所に見られる。比較的最近では Martin Butler が、内乱期直前の演劇研究においてリヴァイヴァルへの目配りのきいた論議を展開している。また R. L. Knutson はシェイクスピアの劇団のレパートリーを論じた書を著しているが、その論考は当然のことながら、初演とリヴァイヴァルの両方を射程に入れている。See E. K. Chambers, *The Elizabethan Stage* (1923; Oxford: Clarendon P, 1961); E. K. Chambers, *William Shakespeare* (1930; Oxford: Clarendon P, 1988); G. E. Bentley, *The Jacobean and Caroline Stage*, vol. 1 (Oxford: Clarendon P, 1968); Martin Butler, *Theatre and Crisis, 1632–1642* (Cambridge: Cambridge UP, 1987); R. L. Knutson, *The Repertory of Shakespeare's Company, 1594–1613* (Fayetteville: U of Arkansas P, 1991).
- 7) Margot Heinemann, *Puritanism and Theatre: Thomas Middleton and Opposition Drama under the Early Stuarts* (Cambridge: Cambridge UP, 1982) 46.
- 8) Janet Clare, 'Art made tongue-tied by authority': *Elizabethan and Jacobean Dramatic Censorship* (Manchester: Manchester UP, 1990) 93.

る。なぜなら上演される芝居の中には再演の劇が含まれているのであって、しかも当局の「監視」下に置かれていたのは、初演作品のみではなかったからである。もしシリアスな政治・歴史劇や非正統的な風刺劇がジェームズ朝中後期においても上演されていたとすれば、そういうジャンルの芝居の上演が政府の弾圧や取締りのために不可能になったとは決して言えないのである。<sup>9)</sup>

演劇史においてリヴァイヴアルが軽視されるのは、故なしとしない。劇場座が建設された1576年から劇場閉鎖令が発布された1642年までに、少なくとも約1,200の劇が創作あるいは上演されている。しかし上演記録が残っているのはごく一部である。再演はおろか初演についても事情がわからないのであるから、上演にもとづく演劇史を構築することはむずかしいのである。しかしだからといって、再演あるいは再々演を考慮しない演劇史を許容してよいとはならないだろう。本稿では、演劇史＝創作・初演史の問題点を明らかにするために、以下の仮説に沿って議論を進めていく。冒頭に述べたように、英国歴史劇を中心に検証を行う。

1. 英国ルネサンス期において、人気作品は、再演、再々演を行うことが普通であった。したがって、創作・初演情報のみにもとづき、ある演劇の流行・衰退を云々するのは不合理である。ヘンズロウの *Diary* は、このことを明示する決定的な資料である。
2. 戯曲古版本の版数の有無、多寡は、劇場での人気と相関関係にあった。人気作品が戯曲本として刊行されたとはかぎらないが、版数の多い作品は劇場での人気の高さの反映であり、出版に比較的近い時点で上演された可能性が大きい。古版本のタイトルページはしばしば、これに関する情報を記述している。
3. エリザベス朝創作・初演の歴史劇には、ジェームズ朝において版を

---

9) ハイネマンは他の論考で、1610年以前に書かれた悲喜劇が1620年代、30年代に再演されたことに触れているけれども、リヴァイヴアルへの目配りは、ジェームズ朝前半の演劇史全体の記述に及んでいない。ハイネマンは、ジェームズ朝初期において検閲が強化され、劇団が宮廷の庇護に依存したために、宗教的・社会的問題に関する不安や不満を公衆劇場で表出することがむずかしくなったと、もっぱら創作・初演劇の分析にもとづく通説を反復している。See Margot Heinemann, “God Help the Poor: The Rich Can Shift”: *The World Upside-Down and the Popular Tradition in the Theatre*, *The Politics of Tragicomedy: Shakespeare and After*, eds. Gordon McMullan and Jonathan Hope (London: Routledge, 1992) 151-52.

重ねているものが多い。重版を重ねている歴史劇は、劇場での人気作品であった可能性が大きい。

4. ジェイムズ朝初期に、いくつもの新作英国歴史劇が書かれている。歴史劇の題材は枯渇しつつあったにもかかわらず。このことは、依然として歴史劇に対する根強い需要が存在していたことを物語る。
5. ジェイムズ朝の後半においても、シェイクスピアの歴史劇とヘイウッドなどのいわゆる「感傷的歴史劇」とがともに上演されていたと思われる。チャールズ朝後半には、英国歴史劇の上演は減少したかもしれない。しかし歴史劇の「寿命」は他のジャンルの芝居と比べて特に短いということはなく、歴史劇は劇場閉鎖令発布に近い歴史的時点まで生き延びた。

## II

ヘンズロウの「日記」は、エリザベス朝の劇団の経営、劇場の収支に関する多大の情報を提供してくれる貴重な文書である。特に1592年2月から1597年11月末までについては、ローズ座の公演日、公演演目、収入が詳細に記録されており、これを調査することによりヘンズロウの関係劇団の活動をかなり具体的に知ることができる。「日記」は、劇団のレパートリーにかならず再演作品が含まれていたこと、そして一部の旧作は新作に劣らず頻繁に上演されたことを示している。

周知のように、英国ルネサンス期の演目は日替りであって、同一作品が連続上演されることはほとんどなかった。初演、再演にかかわらず、人気演目の上演回数は1月に4-5回であった。たとえば1592年に初演された*Henry VI*（おそらくシェイクスピアの*Henry VI*）は、このカテゴリーに入る。<sup>10)</sup> *Henry VI*は、同年の3月から7月までに少なくとも15回上演されているが、初演月の3月だけで5回の上演回数である。同年4月初演の*Titus and Vespasian* (*Titus Andronicus*と何らかの関連があったかもしれない作品) はやや少な

10) 上演作品と上演回数については、J. Leeds Barroll, 'The Social and Literary Context', *The 'Revels' History of Drama in English*, vol. 3: 1576-1613, eds. Clifford Leech and T. W. Craik (London: Methuen, 1975) 60-94, R. A. Foakes and R. T. Rickert, eds., *Henslowe's Diary* (Cambridge: Cambridge UP, 1961) 16-60参照。

く、1592年4月から6月まで計7回の上演である。同じ新作でも1593年1月5日に初演されたと思われる *The Jealous Comedy* は、この月間の上演は初回の上演だけであった。ちなみに同月に、旧作 *The Jew of Malta* (1589年頃初演) は、人気新作なみに3回上演されている。同じく旧作の *The Spanish Tragedy* (1587年頃初演) は、同月に2回の上演が行われている。1594年について見てみると、9月25日初演の新作 *The Love of an English Lady* は、9月と10月に計2回の上演しか行われていない。一方旧作の *Tamburlaine* (1587年頃初演) は、同2ヶ月間に計4回、*Doctor Faustus* (1592年頃初演) は計3回上演されている。上記 *The Spanish Tragedy* は、1597年にいたっても上演の頻度は高く、1月から7月までに計12回上演されている。ちなみに1597年1月14日に初演された新作 *Alexander Lodowick* は7月までに15回上演され、1月27日初演の *A Woman Hard to Please* は5月まで11回の上演が行われている(6月と7月は上演記録なし)。 *Alexander Lodowick* と *A Woman Hard to Please* は、新作としてまずまずの上演回数であるが、新作 *Guido* は3月と4月の計5回の上演記録しか残っていない。劇場における新作と旧作品との関係をより具体的に見るために、1595-1597年の各1月にローズ座において上演された演目を以下に記す。上演劇団は、海軍大臣一座である。斜字体は、再演作品である。

| 演目(推定創作初演年)                                  | 上演回数(括弧内は旧作上演回数) |
|--|------------------|
| (1-31 January 1595)                          |                  |
| <i>Tamburlaine</i> (1587)                    | (1)              |
| <i>2 Tamburlaine</i> (1588)                  | (2)              |
| A Set at Mawe (14 Dec. 1594)                 | 3                |
| The French Doctor (1594)                     | 2                |
| Antony and Vallia (1590[?]-1595)             | 1                |
| A Knack to Know an Honest Man (23 Oct. 1594) | 2                |
| <i>Doctor Faustus</i> (1592)                 | (2)              |
| The Grecian Comedy (1588[?]-1594)            | 3                |
| Tasso's Melancholy (13 Aug. 1594)            | 2                |
| The Siege of London (1580-94)                | 2                |
| The Wiseman of Westchester (3 Dec. 1594)     | 2                |
| Caesar and Pompey (8 Nov. 1594)              | 1                |

|  |                    |
|--|--------------------|
| The Ranger's Comedy (1580-1594)              | 1                  |
| Total  | 24                 |
| (1-31 January 1596)                          |                    |
| Seven Days of the Week (3 June 1595)         | 1                  |
| Crack me this Nut (5 Sep. 1595)              | 2                  |
| Chinon of England (3 Jan. 1596)              | 4                  |
| Harry the Fifth (28 Nov. 1595)               | 2                  |
| 1 Hercules (7 May 1595)                      | 1                  |
| A Knack to Know an Honest Man (23 Oct. 1594) | 1                  |
| The New World's Tragedy (17 Sep. 1595)       | 2                  |
| <i>The Jew of Malta</i> (1589)               | (3)                |
| A Toy to Please Chaste Ladies (14 Nov. 1595) | 1                  |
| <i>The Siege of London</i> (1580-94)         | (1) <sup>11)</sup> |
| A Wonder of Woman (16 Oct. 1595)             | 2                  |
| Pythagoras (16 Jan. 1596)                    | 3                  |
| The Wiseman of Westchester (3 Dec. 1594)     | 1                  |
| Bernardo and Fiammetta (30 Oct. 1595)        | 1                  |
| ? 2 Seven Days of the Week (23 Jan. 1596)    | 2                  |
| Total  | 27                 |
| (1-31 January 1597)                          |                    |
| Vortigern (4 Dec. 1596)                      | 3                  |
| That will be shall be (30 Dec. 1596)         | 5                  |
| Nebuchadnezzar (18 Dec. 1596)                | 4                  |
| <i>Doctor Faustus</i> (1592)                 | (1)                |
| <i>The Spanish Tragedy</i> (1587)            | (5)                |
| Captain Thomas Stukeley (10 Dec. 1596)       | 2                  |

---

11) *The Siege of London* (1月13日上演)は、前年(1595年)9月20日以来の再演。1月のリヴァイヴァルはどうやら不入りであった。ヘンズロウの受領額(棧敷席からのあがりの半分)は、わずかに15シリングである。ちなみに同月の*The Jew of Malta*は、56シリング(9日)、38シリング(18日)、25シリング(29日)の収益をヘンズロウにもたらしめている。

|   |    |
|---|----|
| Alexander and Lodowick (14 Jan. 1597)         | 1  |
| The Blind Beggar of Alexandria (12 Feb. 1596) | 2  |
| A Woman Hard to Please (27 Jan. 1597)         | 2  |
| Long Meg of Westminster (14[?] Feb. 1595)     | 1  |
| Total   | 26 |

上掲の上演回数から平均的な数値を算出すると、海軍大臣一座のレパトリーに占める旧作の割合はおよそ2割となる。再演の占める比率はもちろん、時期によって異なる。たとえば1594年12月はリヴァイヴァルがひじょうに多く、全上演数19のうち7(4割弱)が旧作品の上演であった。すなわち *Doctor Faustus* が3, *The Jew of Malta* が1, *Tamburlaine* が2, *2 Tamburlaine* が1の合計7であった。

次に、年間の上演数と再演の関係を見てみよう。以下に、海軍大臣一座の、1595-1597年の年別延べ上演数、上演作品数、初演数、継続上演・再演作品数を示す。

|       | (1595) | (1596)      | (1597)    |
|-------|--------|-------------|-----------|
| 上演数   | 215    | 上演数 173     | 上演数 151   |
| 作品数   | 33-34  | 作品数 32      | 作品数 24-25 |
| 初演    | 16-18  | 初演 12-13    | 初演 11-12  |
| 継続・再演 | 16-17  | 継続・再演 19-20 | 継続・再演 13  |

1595-97年の海軍大臣一座の年平均演目数は、30強である。1596年と1597年の上演数が少ないのは、記録の欠落した月が多いためである。<sup>12)</sup> 記録の欠落は、劇場公演が行われなかったことを意味しているかもしれない。全上演のおよそ半分が継続・再演作品であるが、継続・再演作品のうち旧作品は3-5本である。再演の全上演数に占める割合は平均2割弱である。これを多いと見るか少ないと見るかむずかしいところだが、上述したように、時期によっては3割を超える。決して無視できる数字ではない。

このように海軍大臣一座の上演作品のなかにはかなりの旧作品が含まれて

12) 1596年は3月、8月、9月の記録が欠落し、1597年は8月、9月、11月、12月の記録が欠けている。

いたのであるが、事情は他の劇団でもおそらく似たり寄ったりであって（というのも、海軍大臣一座が特殊な劇団であったと考える理由はないのであるから）、彼らのレパトリーにはかならず旧作品が含まれていたであろう。だとすれば、ある演劇について、創作初演年あるいは初演シーズンの終了をもってその終焉を断じることはできないのである。作品によっては、長きにわたってくり返し上演されている。10年以上生き延びている作品も珍しくない。ヘンズロウの「日記」によれば、今日よく知られている作品（たとえば上述のマーロウの劇）は大体において長命であるが、現在それほど有名ではない作品でも、2、3年以上継続的に上演された作品はいくつもある。たとえば1594年6月10日初演の*Belin Dun*は、少なくとも1597年6月25日まで上演の記録があり、1594年12月3日初演の*The Wiseman of Westchester*は1597年7月にいたってもまだ3回、つまり新作に劣らず頻繁に上演されている。「新作」の定義にもよるが、かりにそのシーズンに創作された作品だけを新作だとすれば、新作上演の割合はかなり小さくなる。となれば、創作・初演劇のリストのみにもとづき、演劇の流行衰退を云々することは不合理だと言わざるをえないのである。

### III

ジェイムズ朝演劇についてはヘンズロウの「日記」のような資料がなく、どういう作品がくり返し上演されたかを具体的に知ることは困難である。しかし、まったく手がかりがないわけではない。手がかりとは、戯曲古版本である。ヘンズロウの「日記」は、いくつかの作品の上演回数がきわだっただうことを示している。たとえば*The Spanish Tragedy*やマーロウの劇がそうである。これらの人気作品は、四折本で出版されている。注目すべきは、上演回数と四折本版数との関係である。劇場での人気演目のすべてが出版されているわけではない、あるいは古版本が現存しているわけではない。しかしヘンズロウの「日記」から判断するかぎり、版を多く重ねている戯曲はすべて劇場での人気作品であり、再演、再々演が行われている。ここから、次のように推論することができる。版数の多い戯曲は劇場での上演回数が多い人気作品であって、戯曲本の出版に近い時点で再演された可能性が高い。当時の刊本は宗教関係書が中心であって、戯曲本の出版はかならずしも金にならぬビジネスであった。<sup>13)</sup> 舞台上で上演もされず、ということは世の耳目をひく

ことが少ない芝居を、書籍商が積極的に出版したとは思われない。書籍商は戯曲を、劇場での人気が高く、刊本の需要が見込めるがゆえに出版したと考えられるのである。もしこの仮説が正しければ、戯曲の出版は上演が行われたことの間接証拠とみなすことができるだろう。

エリザベス朝・ジェイムズ朝戯曲本のベストセラーと言え、*Mucedorus* (1598年初版)、*Doctor Faustus* (1604年初版)、*The Spanish Tragedy* (1592年初版)、そして *1 Henry IV* (1598年初版) である。初版刊行25年以内に発行された版数は、*Mucedorus* が<sup>9</sup>、*Doctor Faustus* が<sup>8</sup>、*The Spanish Tragedy* と *1 Henry IV* がそれぞれ7である。<sup>14)</sup> いずれも劇場で大当たりをとった作品であった。

前記 *The Spanish Tragedy* (1589年頃初演) が長期にわたって人気演目であったことは、ヘンズロウの「日記」から疑問の余地がない。「日記」によれば、*The Spanish Tragedy* は、1592年3月から1593年の1月にストレンジ卿一座によって少なくとも16回のリヴァイヴァル上演が行われ、1597年1月から7月までに海軍大臣一座によって12回の再演が行われ、さらに1601年と1602年にも上演されている。<sup>15)</sup> *The Spanish Tragedy* がジェイムズ朝においても人気演目であったらしいことは、ベン・ジョンソンの言及からもうかがえる。ジョンソンは、*Bartholomew Fair* (1614) の前口上において、*The Spanish Tragedy* (と *Titus Andronicus*) を (初演から25年か30年たった今もなお) 最良の芝居だと思ふ人々がいることを揶揄しているが、<sup>16)</sup> これはこの劇がジェイムズ朝においても依然として上演されていたことを示唆している。

*Doctor Faustus* のリヴァイヴァルについてはすでに触れたが、海軍大臣一座はこの劇を、1594年10月から1597年10月までに少なくとも24回上演しており、さらに1602年から1603年にも復活上演しているのは確実である。というのも、1602年11月22日にヘンズロウは、*Doctor Faustus* の「修正料」4ポンドを、ウィリアム・バードとサミュエル・ローリーに支払っているからであ

13) Peter W. M. Blayney, 'Publication of Playbooks', *A New History of Early English Drama*, eds. John D. Cox and David Scott Kastan (New York: Columbia UP, 1997) 389.

14) Blayney, 'Publication of Playbooks', 388.

15) ヘンズロウは、1601年9月25日と1602年6月22日に、ベン・ジョンソンにこの劇の加筆料を支払っている。See Foakes, *Henslowe's Diary*, 182, 203. See also Chambers, *Elizabethan Stage*, vol. 3, 396.

16) Martin Butler, ed., *The Selected Plays of Ben Jonson*, vol. 2 (Cambridge: Cambridge UP, 1989) 160.

る。<sup>17)</sup>

*Mucedorus*と*1 Henry IV*も、エリザベス朝演劇のなかできわだって人気の高かった作品である。*Mucedorus*は、本来宮内大臣一座の演目であったかどうかは定かでないが、後に国王一座の重要演目になり、ジェームズの宮廷でも上演されている。*1 Henry IV*については、劇場公演記録は残っていない。しかしこの劇は1612-13年のクリスマス、さらに1625年1月1日夜にも宮廷上演が行われていることから、<sup>18)</sup> ジェームズ朝以後も根強い人気を保っていたであろうと推測されるのである。

*The Spanish Tragedy*が1592年3月から1593年の1月、そして1597年1月から7月にリヴァイヴァルされたことについてはすでに述べた。注目すべきは、復活上演を追うように、1594年と1599年にその四折本が出版されていることである。*1 & 2 Tamburlaine*についても同じことが言える。*1 Tamburlaine*は1594年8月から1595年11月までに少なくとも15回、*2 Tamburlaine*は1594年12月から1595年11月までに7回の再演が行われているが、1597年に*1 & 2 Tamburlaine*第3版が出版されている。ヘンズロウの「日記」によれば、*The Jew of Malta*は、1592年2月から1594年12月まで少なくとも28回のリヴァイヴァルが行われている。この劇のエリザベス朝古版本は現存しないが、1594年5月17日に出版登記が行われている。現実には出版されたかどうかは不明だが、舞台での人気を当て込んで出版が試みられたのは間違いないだろう。

以上のことから、次のように結論することができるだろう。舞台での人気作品が直ちに出版されたとはかぎらないが、古版本の存在は、刊行年に比較的近い時点で（通常過去1、2年以内に）上演あるいは再演が行われた可能性が大きい。ちなみにシェイクスピアの主要作品の四折本の多くは、初演後1、2年以内に初版が出版されている。

英国ルネサンス期の戯曲古版本のタイトルページには、戯曲標題、作者名、印刷者名、劇の見せ場などに関する記述と並んで、上演に関する記載がしばしば現れる。この記述は、しばしば再演に言及している。たとえば1609年に出版された*Romeo and Juliet*（1595年頃初演）の第3四折本のタイトルページには、「国王一座により何度も上演された」とある。ということは、

17) Foakes, *Henslowe's Diary*, 206; Chambers, *Elizabethan Stage*, vol. 3, 423.

18) N. W. Bawcutt, ed., *The Control and Censorship of Caroline Drama: The Records of Sir Henry Herbert, Master of the Revels 1623-73* (Oxford: Clarendon P, 1996) 159.

*Romeo and Juliet* は、ジェイムズ朝に入っても再演、再々演が行われたであろうということである。もちろん、「国王一座により上演された」という記述は、国王一座による再演をかならずしも意味しないかもしれない。これは一種の広告文にすぎないのであって、ただ現状に合うように情報を更新して「国王一座」としただけかもしれない。しかしそれでも、タイトルページの再演に関する記述は、多くの場合字義どおりに解釈してよいと思う。先に述べたように、刊本の出版は、出版に近い時点での上演を示唆するからである。*Romeo and Juliet* については、ジョン・マーストンの証言から、1598年頃カーテン座で再演されていたことは間違いないが、<sup>19)</sup> 1599年の第2四折本は、この再演の人気を当て込んで出版された可能性が大きい。

1611年に出版された、*Titus Andronicus* の第3四折本のタイトルページにも、「国王一座にによって何度も上演された」とある。この劇に言及する、ベン・ジョンソンの *Bartholomew Fair* の前口上とタイトルページの記述から判断して、*Titus Andronicus* がジェイムズ朝においてリヴァイヴァルされていたことはまず間違いないだろう。

シェイクスピアの *Richard II* (1595年頃初演) は、エリザベス朝戯曲古版本ベストセラー第5位である。<sup>20)</sup> 1597年に第1四折本が出版されているが、以後25年間に計5版が発行されている。この歴史劇は、1631年6月にグローブ座で再演されている。<sup>21)</sup> これより先、1601年2月に、例のエセックス伯反乱事件の前日グローブ座でも上演されているが、これは特殊な一回かぎりの上演であった。*Richard II* の1608年出版の四折本には、いわゆる「廢位の場」を新たに加えて国王一座により最近グローブ座で上演されたとするタイトルページをもつ版がある。おそらくこの「古い劇」も、ジェイムズ朝に入って復活上演されたのである。

*Richard II* 以外にも、古版本タイトルページから、ジェイムズ朝において再演されたと思われる歴史劇がいくつも存在する。エリザベス朝初演の歴史

---

19) Chambers, *William Shakespeare*, vol. 2, 195–96.

20) Blayney, 'Publication of Playbooks', 388.

21) 祝典局長ハーバートは、1631年6月12日、『リチャード二世』公演2日目に、国王一座から5ポンド6シリング6ペンスの贈与を受けている。See Bawcutt, *Control and Censorship*, 173; Chambers, *Shakespeare*, vol. 2, 348. ちなみに2日前の6月10日には、*Pericles* がリヴァイヴァルされている。ハーバートは、疫病終息公演再会許可の謝礼として、同じく国王一座から3ポンド10シリングの謝礼を受領している。

劇のうち、ジェイムズ朝再演の情報を伝えていると思われる刊本のタイトルページの記載を初版本の記述とあわせて以下に記す。括弧内は、推定創作・初演年である。

*The Famous Victories of Henry V* (1586)

1598 ‘As it was plaide by the Queenes Maiesties Players’.

1617 ‘. . . as it was Acted by the Kinges Maiesties Seruants’.

*Richard III* (1593)

1597 ‘As it hath beene lately Acted by the Right honourable the Lord Chamberlaine his seruants’.

1612 ‘As it hath beene lately Acted by the Kings Maisties seruants’.

*Thomas Lord Cromwell* (1600)

1602 ‘As it hath beene sundrie times publikely Acted by the Right Honourable the Lord Chamberlaine his Seruants’.

1613 ‘As it hath been sundry times publikely Acted by the Kings Maiesties Seruants’.

タイトルページにジェイムズ朝の劇団名が記載されている作品は（出版されたという事実とあわせて考えると）ジェイムズ朝に入って再演された可能性が大きい。ジェイムズ朝に出版された、エリザベス朝初演劇のタイトルページには、エリザベス朝の劇団により上演されたことを明記しているものが少なくない。たとえばシェイクスピアの*Henry V*の第3四折本（1619）。エリザベス朝に出版された第1四折本（1600）と第2四折本（1602）のタイトルページには、「宮内大臣一座により何度も上演された」とあるが、ジェイムズ朝刊本にも同じ記述が現れる。このような作品は、再演はされず出版のみが行われたと考えるべきなのだろうか。私はやはり、再演されたがゆえにその脚本が出版された可能性が大きいと思う。戯曲古版本のタイトルページには「最近上演された」と記されているものが多いが、これは、戯曲本の場合上演されたことが刊本の印刷販売の前提条件であったことを示唆する。上述したように、上演が好評を博したがゆえに、書籍商は、その脚本の出版による利潤を期待して刊行したのではないかと考える。*Henry V*の第3四折

本がジェームズ朝の出版にもかかわらず、「宮内大臣一座により上演」と記されているのは、印刷所原本として第1四折本が使用されたからだと考えられるのである。

## IV

ジェームズ朝初期には新しい英国歴史劇がいくつも創作・初演されている。これらの作品の多くは出版されている。他方でシェイクスピアその他のエリザベス朝の歴史劇がいくつもジェームズ朝において出版されている。以下は、歴史劇の古版本リストである。比較のために、他のジャンルのシェイクスピア劇古版本一覧を下方に示す。

## 英国歴史劇 (Shakespearean)

*1, 2, 3 Henry VI* (1591-92). Q1 (1594, pt. 1), Q1 (1595, *The true Tragedie...*), Q2 (1600, *The True Tragedie...*), Q3 (1619, *The Whole Contention...*), F1 (1623). [S.R.] 1630, F2 (1632).

*Richard III* (1593). Q1 (1597), Q2 (1598), Q3 (1602), Q4 (1605), Q5 (1612), Q6(1622), F1(1623), Q7 (1629), F2 (1632), Q8 (1634).

*Richard II* (1595). Q1 (1597), Q2 (1598), Q3 (1598), Q4 (1608), Q5 (1615), F1 (1623), F2 (1632), Q6 (1634).

*King John* (1596). F1 (1623), F2 (1632)

*1 Henry IV* (1597). Q1 (1598), Q2 (1599), Q3 (1604), Q4 (1608), Q5 (1613), Q6 (1622), F1 (1623), Q7 (1632), F2 (1632), Q8 (1639).

*2 Henry IV* (1597). Q (1600), F1 (1623), F2 (1632).

*Henry V* (1599). Q1 (1600), Q2 (1602), Q3 (1619), F1 (1623), [S.R.] 1626, [S.R.] 1630, F2 (1632).

*Henry VIII* (1613). F1 (1623), F2 (1632).

## 英国歴史劇 (Non-Shakespearean)

*1 & 2 The Troublesome Reign of King John* (1588). 1591, 1591 (pt. 2), 1611 (pts. 1 & 2), 1622 (pts. 1 & 2).

*The Famous Victories of Henry V* (1586). 1598, 1617.

*Edward I* (1591). 1593, 1599.

*Edward II* (1592). 1594, 1598, 1612, 1622.  
*Edward III* (1590). 1596, 1599.  
*1 & 2 Edward IV* (1599). 1600, 1605, 1613, 1619, 1626.  
*1 Sir John Oldcastle* (1599). 1600.  
*Thomas Lord Cromwell* (1600). 1602, 1613.  
*When You See Me You Know Me* (1604). 1605, 1613, 1621, 1632.  
*1 If You Know not Me, You Know Nobody* (1604). 1605, 1608, 1610,  
 1613, 1623, 1632, 1639.  
*2 If You Know not Me, You Know Nobody* (1605). 1606, 1609, 1623?  
 (n. d.), 1632.  
*The Whore of Babylon* (1606). 1607.

喜劇 (Shakespearean)

*The Comedy of Errors* (1592). F1 (1623), F2 (1632).  
*The Two Gentlemen of Verona* (1593). F1 (1623), F2 (1632).  
*The Taming of the Shrew* (1594). F1 (1623), Q (1631), F2 (1632).  
*Love's Labour's Lost* (1595). Q1 (1598), S.R.1607, F1 (1623), Q2  
 (1631), F2 (1632).  
*A Midsummer-Night's Dream* (1595). Q1 (1600), Q2 (1619), F1 (1623),  
 F2 (1632).  
*The Merchant of Venice* (1596). Q1 (1600), Q2 (1619), F1 (1623), F2  
 (1632), Q3(1637).  
*Much Ado about Nothing* (1598). Q (1600), F1 (1623), F2 (1632).  
*As You Like It* (1599). F1 (1623), F2 (1632).  
*Twelfth Night* (1600). F1(1623), F2 (1632).  
*The Merry Wives of Windsor* (1600). Q1 (1602), Q2 (1619), F1 (1623),  
 Q3 (1630), F2 (1632).  
*All's Well that Ends Well* (1602). F1 (1623), F2 (1632).  
*Measure for Measure* (1604). F1 (1623), F2 (1632).

悲劇 (Shakespearean)

*Romeo and Juliet* (1595). Q1 (1597), Q2 (1599), Q3 (1609), Q4 (n.d.),

F1 (1623), F2 (1632), Q5 (1637).

*Hamlet* (1601). Q1 (1603), Q2 (1604), Q3 (1611), F1 (1623), Q4 (n.d.),  
F2 (1632), Q5 (1637).

*Othello* (1604). Q1 (1622), F1 (1623), Q2 (1630), F2 (1632).

*King Lear* (1605). Q1 (1608), Q2 (1619), F1 (1623), F2 (1632).

*Macbeth* (1606). F1 (1623), F2 (1632).

ローマ史劇その他 (Shakespearean)

*Titus Andronicus* (1594). Q1 (1594), Q2 (1600), Q3 (1611), F1 (1623).  
[S.R.] 1626, F2 (1632).

*Julius Caesar* (1599). F1 (1623), F2 (1632).

*Troilus and Cressida* (1602). Q (1609, two issues), F1 (1623), F2 (1632).

*Antony and Cleopatra* (1607). [S.R.] 1608, F1 (1623), F2 (1632).

*Timon of Athens* (1607). F1 (1623), F2 (1632).

*Coriolanus* (1608). F1 (1623), F2 (1632).

ロマンス劇 (Shakespearean)

*Pericles* (1608). Q1 (1609), Q2 (1609), Q3 (1611), Q4 (1619), Q5  
(1630), Q6 (1635).

*Cymbeline* (1609). F1 (1623), F2 (1632).

*The Winter's Tale* (1610). F1 (1623), F2 (1632).

*The Tempest* (1611). F1 (1623), F2 (1632).

上掲リストから明らかのように、エリザベス朝の人気作品は、ジェームズ朝に入っても出版されている。歴史劇の出版点数は、他のジャンルと比較すると明らかに多い。全体として見ると、シェイクスピアの作品だけでなく、他の作家の英国歴史劇も比較的多く刊行されている。以上のことから、次のように結論することができる。ジェームズ朝において、新作の英国歴史劇が少なくなったこと即歴史劇の衰退を意味するのではない。ジェームズ朝初・中期においては、新作と旧作の英国歴史劇が上演されていて、英国歴史劇は活況を呈していたのではないかと思う。ジェームズ朝後半においても、ジェームズ朝初・中期に書かれた、比較的新しいタイプの英国歴史劇と、シェイクスピアに代表される「古い」タイプの歴史劇が断続的・周期的に、あるい

は時には新作に劣らぬ頻度で再演されていたのではないだろうか。たしかにシェイクスピアの*Henry VIII*が創作・初演された1612-13年頃を境にして新作歴史劇は減少しているから、そういう意味ではだいに衰退していったと言える。しかしその「衰退」のスピードは、従来考えられていたよりかなり遅かったと思う。

チャールズ朝に入ると、歴史劇の創作・初演だけでなく、エリザベス朝・ジェイムズ朝の歴史劇の出版も少なくなっているようであるから、この時代には英国歴史劇は流行しなくなっているのかもしれない。これを裏づけるかのように、ジョン・フォードは*Perkin Warbeck*の序詞において、「このような種類の作品 (studies . . . of this nature)」(おそらく英国歴史劇を指す)が今はすたれてしまったと述べている。しかし「すたれてしまった (so out of fashion, so unfollowed)」とはいかなる意味であろうか。<sup>22)</sup>これが当時の演劇事情を語っていることは疑いえないにしても、エリザベス朝・ジェイムズ朝の歴史劇の再演にまで言及しているのであろうか。これについて確定するのは容易ではないが、忘れてならないのは、たとえ英国歴史劇が衰退したとしても、それは相対的なものであって、チャールズ朝において歴史劇が消滅したのではないということである。依然として「古い」歴史劇の復活上演が行われているのである。たとえばシェイクスピアの*Richard II*が1631年にグローブ劇場で再演されたことはすでに触れた。*Richard II*は1634年にQ 6が出版されているが、この頃にも再演されているかもしれない。1633年11月16日には、*Richard III*の宮廷上演が行われている。<sup>23)</sup>*Richard III*の劇場公演記録は残っていないが、宮廷上演に先立ち、あるいはその前後に、劇場公演が行われたのかもしれない。シェイクスピアの*1 Henry IV*は1632年にQ 7が、1639年にQ 8が出版されている。出版に近い時点で再演された可能性が大きい。ヘイウッドの*If You Know not Me, You Know Nobody*の第1部および2部の四折本は、1632年に出版され、第1部はさらに1639年に出版されている。この劇は、ジェイムズ朝・チャールズ朝を通して最も人気の高かった作品の一

22) 「すたれてしまった」と言うからには、当代と対比される「流行していた」時代の記憶がフォードの念頭にあったはずである。英国ルネサンス演劇研究者はまず間違いなく、「流行していた」時代として1590年代を想起するだろう。しかし1586年生れのフォードは、90年代にはまだ幼年である。おそらくフォードにとって、*Perkin Warbeck*と連想されるクロニクル・ヒストリーの流行期は、ジェイムズ朝以降のことであっただろう。

23) Chambers, *Shakespeare*, vol. 2, 352.

つであり、くり返し再演されたであろうと考えられるのである。<sup>24)</sup>

V

以上において検証したように、英国歴史劇の上演はジェイムズ朝・チャールズ朝にも行われたのであって、年代による消長はあっても歴史劇が完全に死に絶えることはなかったのである。シェイクスピアの歴史劇の多くが、またその他のエリザベス朝とジェイムズ朝の歴史劇が、ジェイムズ朝後半においては言うまでもなくチャールズ朝においても復活上演され、他方で頻度は減少したといえ新作歴史劇が上演されたのである。ただ注意しなければならないのは、歴史劇が上演されたからといって、チャールズ朝にいたってなお歴史劇というジャンルに対する需要が存在したとはかならずしも言えないということである。<sup>25)</sup> *Richard III* が、*Richard II* が、あるいは *I Henry IV* が上演されたとすればもちろん、これらの歴史劇がチャールズ朝の観客を惹きつけるものをもっていたからである。古来、自国の歴史に対する関心は程度の差はあれ常に存在していて、それが歴史書の刊行や、あるいは自国の歴史を扱った文学作品として結晶している。だからチャールズ朝の人々が歴史劇に惹かれたとしても不思議ではないのであるが、もし人々が「古い」エリザベス朝歴史劇を、素材が英国の歴史であるがゆえに好み、それ故再演されたとすれば、リヴァイヴアルは、歴史劇というジャンルに対する嗜好が存在していたことの反映だと言えるだろう。しかしここのところの判断がむずかしい。観客が何を面白いと思うかは時代によって異なるであろうし、また同時

24) ヘイウッド自身の *Pleasant Dialogues and Dramas* (1637) には、*If You Know not Me, You Know Nobody* がチャールズ朝において (1626年から1637年までのある時に) フェニックス座でリヴァイヴアルされたことに言及する「エリザベス女王の劇の序詩」が収載されている。See Bentley, *Jacobean and Caroline Stage*, vol. 1, 252-53.

25) 英国歴史劇は、1590年代に流行したとされることが多いが、ヘンズロウの「日記」の90年代の上演リストに占める歴史劇の比重は思いのほか小さく、この時代が歴史劇に席卷されていたとはかならずしも言えない。1590年代が英国歴史劇の盛期とされるのは、この時期にシェイクスピアの歴史劇が量産されているからである。もっとも短期的には、シェイクスピアやマーロウの歴史劇が大当りをとり、イングランドの歴史を扱った芝居が流行しているという感覚を人々に抱かせる時期はあっただろう。たとえば1592年3月から5月にかけてのように。この3ヶ月の間に、*Henry VI* が13回上演され、ほかに *Harry of Cornwall* という (失われた) 歴史劇が少なくとも3回上演されている。ほぼ同時期にマーロウの *Edward II* も上演されていたかもしれない。

代でも演劇の嗜好が一枚岩的であったとは思われず、時代の嗜好を確定することは容易ではない。人々はエリザベス朝歴史劇を、歴史劇というジャンルとはかかわりなく、悲劇的なあるいは喜劇的な芝居として楽しんだのかもしれないのである。シェイクスピアの作品は、歴史劇以外にも、たとえば *Othello* や *Hamlet* や *Julius Caesar* など、チャールズ朝において、あるいは宮廷であるいは公衆劇場でリヴァイヴァルされている。これらの作品が再演されたのは、人々が悲劇というジャンルを好んだからだと言うことはできないだろう。同様にシェイクスピアの歴史劇も、またジェイムズ朝初期に書かれたヘイウッドやローリーの歴史劇も、イングランドの歴史を描いているというただそれだけの理由でもてはやされたとは考えられない。しかし理由は何であれ、チャールズ朝の演目の中に今日「英国歴史劇」として分類される作品がいくつも含まれており、そういう意味で歴史劇が生き延びていたのは動かぬ事実であり、したがって歴史劇の衰退や終焉を安易に唱えるべきではないのである。1642年に内乱が勃発し劇場閉鎖令が発せられるが、おそらく閉鎖令発布に比較的近い歴史的時点まで、シェイクスピアの歴史劇やジェイムズ朝の「感傷的歴史劇」は、他のジャンルの演劇と同じように、断続的あるいは周期的に上演されていたのである。